

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 7 年 9 月 9 日現在

機関番号：33920

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K11065

研究課題名（和文）在宅でエンドオブライフを生きる訪問看護利用者への在宅スピリチュアルケアの明確化

研究課題名（英文）Spiritual Care of clients who received their End-of-Life Care in Visiting Nursing

研究代表者

佐々木 裕子（SASAKI, YUKO）

愛知医科大学・看護学部・教授

研究者番号：10351149

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、在宅で終末期を生きる訪問看護利用者（以下、利用者）と訪問看護師の語りおよびPILテスト結果から、利用者が人生に意味や価値があったと実感できることを目指す効果的な在宅スピリチュアルケア内容を明らかにし、講座を創り検証した。成果として、利用者のスピリチュアルニーズは【自己理解したい、価値を認めたい、人生を最期まで創りたい、充足感を味わいたい、家族を愛する存在で居たい、幸せな社会づくりに期待したい】等で、生きる意味を強く感じていた。訪問看護師向けの講座は実践の可視化に繋がった。利用者本人の語りは、体験の再解釈や意味付与でき、在宅スピリチュアルケアに気づきをもたらすことに繋がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、人生のかけがえない時間を自宅で生きる利用者本人の語りからスピリチュアルニーズとケアを明らかにしたことと、人生の最終段階を生きる人に初めてPILテストを実施し、生きる意味の強さを明らかにしたことである。さらに、利用者とは担当する訪問看護師の双方の語りからスピリチュアルケアを具体化し、講座を開発し、検証を試みたことである。社会的価値は本研究結果を用いた実践により訪問看護師が自信をもってケアに当たることができ、人生の最終段階を生きる利用者の満足度が上がる可能性があることである。これらは、在宅終末期ケアの一側面を明らかにでき、今後の多死社会への貴重なデータとなる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to identify effective spiritual care content for home-based end-of-life patients by analyzing narratives from both visiting nurse service client and visiting nurses, as well as the results of PIL test. The ultimate goal was to help clients feel that their lives had meaning and value. Based on the findings, a training program was created and validated. Clients' Spiritual Needs; Desire to understand themselves, acknowledge their own worth, create their life to the very end, experience a sense of fulfillment, remain a loving presence for their family, and have hope for a happy society, clients were strongly their life's meaning. The training program: Designed for visiting nurses helped to make their care practices more visible and tangible. Impact of Client Narratives: The narratives shared by the clients themselves facilitated the reinterpretation and meaning-making of their experiences, leading to a greater awareness of spiritual care within the home setting.

研究分野：在宅看護学

キーワード：スピリチュアルニーズ 生きる意味 スピリチュアルケア 訪問看護 在宅看護 当事者の語り 訪問看護師の語り PILテスト

1. 研究開始当初の背景

少子高齢多死社会に突入した日本社会は、エンド・オブ・ライフ(以下、終末期)ケアの重要性が高まっている。日本人の年間死亡者数は2040年に167万人に達し、そのうち約49万人の終末期ケアが困難になると推計されている(厚生労働省, 2019)。厚生労働省の調査(2018)では国民の60%が終末期を自宅で過ごしたいと考えているが、全死亡者のうち在宅死は13%に過ぎず、国民の人生最期の希望が叶えられていない。そのため厚生労働省や看護職能団体は、在宅死割合を40%まで引き上げるために、訪問看護師の増員と質の向上を目標に掲げ、在宅終末期ケアを推進している。終末期ケアは全人的ケアが重視され、多くの先行研究が行われている。ホスピス緩和ケア財団による大規模調査では、「身体の苦痛は少なく過ごせた」など身体面のケアに満足している報告がある一方で、「人生をまっとうできた」満足度が低く、「人に迷惑をかけてつらい」回答が多く、スピリチュアルな面のケアを充実する必要性が指摘されている(森田, 宮下ら, 2002; 2008)。今後さらに多死社会が進む中で、利用者が人生を締めくくるかけがえのない時期に人生を振り返り、人生をまっとうできたと自身の人生に意味や価値を感じられる、質の高いスピリチュアルケアが重要と考える。しかし、スピリチュアルケアに関する多くの研究は、緩和ケア病棟や高齢者施設など特定のケア環境で過ごす人を対象に行われており、在宅の利用者に焦点をあてた研究は見当たらない。研修会では「スピリチュアルニーズに対応できず最後に入院を勧めた」「在宅で過ごす人は穏やかでスピリチュアルペインがない」という事例報告が多くあり、訪問看護師に焦点をあてた研究では、看護師が不安や戸惑いを感じ対応できていない指摘もある(大園ら, 2016; 寶金ら, 2018)。このような状況を改善するために、訪問看護師が、利用者が人生の最期に自身の人生をまっとうでき、人生に意味があったと実感したいというスピリチュアルニーズに、自信をもって対応できる具体的な在宅スピリチュアルケアの内容を明らかにする必要があると考えた。そこで、人生の終末期を在宅で生きる利用者や家族と、在宅終末期ケアの経験豊富な訪問看護師の実践経験を基に、具体的で実践可能な在宅スピリチュアルケア内容を明らかにしたいと考えた。このケア内容を明らかにすることで、利用者が最期まで在宅で人生に満足感や達成感をもち生きぬくことを支えることを目指し、訪問看護師が自信をもち在宅スピリチュアルケアを実施できることに繋がり、ケア方法に示唆を得ることもできると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、在宅終末期ケアにおいて、利用者自身の人生に意味を感じ価値があったと実感できる、効果的な在宅スピリチュアルケアの内容を、具体的かつ実践可能なものとして示すことである。本研究で明らかにするケア内容を実際に訪問看護師に実践を依頼し、具体的な実践方法や反応などを訪問看護師や遺族と協働で検討することで、効果的に在宅スピリチュアルケアを実践するケア方法への示唆を得る。

3. 研究の方法

研究デザインは、質的記述研究と横断研究およびRCTなしの介入研究である。利用者のスピリチュアルニーズと訪問看護師が行うスピリチュアルケアの要素を訪問看護師の立場(第1研究)と利用者の立場(第2研究A調査とB調査)の双方から明らかにし、この結果を統合した構成要素を下に講座を開発し、実施した講座の満足度と理解度から効果を検証(第3研究)した。

4. 研究成果

1) 第1研究: 自宅で人生の最終段階を生きる人にケア実践する訪問看護師10名に質的記述的研究

訪問看護師が捉える自宅で人生の最終段階を生きる利用者がもつと考えるスピリチュアルニーズは、6つのテーマ【生きたい】【生きる意味を感じたい】【人生に誇りをもちたい】【家族役割を果たし幸せを感じたい】【家で喜びと幸せを感じたい】【人の幸せを願う(境地に立っている)】、実施するスピリチュアルケアは7つのテーマ【関わる態度を整える】【人生と生き方を支える】【人生の満足と達成感を支える】【身体の苦痛を和らげ快を支える】【自宅での安らぎを支える】【家族との過ごし方を支える】【暮らしの環境を支える】で構成されていた。

2) 第2研究A: STROBEに準じ、PILテスト(Purpose in Lifeテスト: 人生の意味テスト)を用いた横断研究

80名の自宅で人生の最終段階を生きる訪問看護利用者の生きる意味を探究するニーズを明らかにすることを目的とした。PILテストは最高126点、最低18点、本研究結果は平均90.5点(SD=19.2)、最高得点123点、最低得点27点、自宅で人生の最終段階を生きる訪問看護利用者は生きる意味を強く持っていた。得点が高かったのは、80歳代以上、女性、がんによる終末期を生きる人で、疼痛がない、医療ケアがない、ADLが自立、訪問者がある人等であった。

3) 第2研究B: 自宅で人生の最終段階を生きる訪問看護利用者10名に質的記述的研究

利用者がもつスピリチュアルニーズは 8 つのテーマ【生きたい】【人生を深く味わい自己理解したい】【生きる意味を探求したい】【人生をまっとうし価値を置いてきたことを認めたい】【自分の人生を最期まで自分で創りたい】【人生を通して充足感を味わいたい】【家庭内で家族を愛する存在で居続けたい】【幸せな社会づくりに期待したい】で、受けたスピリチュアルケアは 7 つのテーマ【生きる苦悩と旅立ちを支えてほしい】【安らかで感謝できる旅立ちを支えてほしい】【自然を感じる生き方を支えてほしい】【人生の満足や誇りと意思を支えてほしい】【日常の楽しみと家族を支えてほしい】【自宅で過ごせるように苦痛を和らげてほしい】【信頼できる看護師に関心を寄せて関わってほしい】で構成されていることが明らかになった。第 1 研究と第 2 研究 A・B を統合した構成要素を用いて講座を開発した（「スピリット講座」と命名した）。

4) 第 3 研究：CONSORT 声明に準じ、RCT なしの介入研究

第 1 研究の研究参加者および第 2 研究 A・B の研究参加者の紹介を承諾された訪問看護師 51 名（介入群 27 名，対照群 24 名）に，第 1 研究，第 2 研究 A，第 2 研究 B を統合して作成した「スピリット講座」を用いて，講座の効果を検証する目的で介入研究を実施した。

講座前後の総得点は，介入群の講座前の満足度は平均 18.52 点（SD±3.65，範囲 26 点-12 点），講座後の平均 24.89 点（SD±2.95，範囲 32 点-19 点）で有意差がみられ（ $p<0.001$ ），対照群は有意差がなかった（ $p=0.05$ ）。介入群の講座前の理解度は平均 2 点（SD±0.64，範囲 3 点-1 点），講座後は平均 3.22 点（SD±0.42，範囲 4 点-3 点）で有意差があり（ $p<0.001$ ），対照群は有意差がなかった（ $p=0.05$ ）。介入群と対照群の 2 群間の講座前後の満足度と理解度を比較すると，介入群の講座前後の変化の差は 6.37，両群の差が 1.16，介入群の方が講座前後の数値の変化が大きかったが，統計学的な有意差はなかった（ $p=0.187$ ）。理解度については，介入群の講座前後の変化の差は 1.26，両群の差が 0.76，介入群が統計学的に有意差があった。

5) 第 3 研究後の研修実施

第 3 研究の研究参加者の訪問看護ステーションにおいて研修を実施し，以下の感想を得た。「現場で出会う終末期の利用者の言動がこのスピリチュアルニーズであったと繋がり気付きを得た。自分たちのケアに自信をもつことができた。マイナスと思っていた利用者の言動に様々なニーズがあり，そのニーズを知ることで利用者の理解に繋がると実感した。研修で提示された表現を用いて利用者の思いを引き出していきたい。」等であり，講座で示した表現を用いて実践したいと感想を得ることができ，講座内容を渡し実践を依頼した。今後実践後の評価を得て，精選していく予定である。また，当初は集合型のワークショップの実施を予定していたが，多忙を極める訪問看護ステーションの事情を鑑み，個別に訪問看護ステーション等での研修実施へと方法を変更し実施した。現在も継続実施中である。

6) 研究成果のまとめ

研究成果の学術的意義として，人生のかけがえのない時間を自宅で生きる訪問看護利用者本人の語りからスピリチュアルニーズとケアを明らかにできた。さらに，人生の最終段階を生きる人に，初めて PIL テストを実施し，生きる意味の強さを明らかにした。加えて，人生の最終段階を自宅で生きる訪問看護利用者とは担当する訪問看護師の双方の語りからスピリチュアルケアを具体化し，講座を開発し，検証を試みたことには意義があったと考える。

本研究で開発した「スピリット講座」を訪問看護師に行うことにより，訪問看護師が自信を持ち利用者のスピリチュアルニーズを捉え，スピリチュアルケアを実施できると考える。本講座を普及できれば，利用者が最期まで充たされて自宅で生きぬくことが可能となることが示唆された。これらは，在宅終末期ケアの一側面を明らかにでき，今後の超高齢多死社会への貴重なデータとなり得ると考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐々木裕子, 西川まり子	4. 巻 11
2. 論文標題 自宅で終末期を生きる壮年期女性で訪問看護利用者のスピリチュアルニーズ –本人の語りから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本在宅看護学会誌	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木裕子, 西川まり子	4. 巻 11
2. 論文標題 自宅で人生の最終段階を生きる人の「生きる意味」の特徴 –Purpose in Lifeテスト(PILテスト)による横断研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本ヒューマンヘルスケア学会誌	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐々木裕子, 西川まり子
2. 発表標題 自宅で終末期を生きる一人暮らし高齢女性のもつスピリチュアルニーズ –本人の語りから
3. 学会等名 日本ヒューマンヘルスケア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木裕子, 坂口美和, 小塩泰代, 伊藤寿英, 西川まり子
2. 発表標題 訪問看護師が捉える 人生の最終段階を自宅で生きる人の スピリチュアルニーズとケア
3. 学会等名 日本在宅看護学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yuko Sasaki, Toshihide Ito, Miwa Sakaguchi, Yasuyo Ojio, Mariko Nishikawa
2. 発表標題 Spiritual needs of clients who lived their end-of-life at home
3. 学会等名 7th International GNPHN Conference (国際学会)
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西川 まり子 (Nishikawa Mariko) (80412344)	東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・客員研究員 (12601)	
研究分担者	坂口 美和(荒木美和) (Sakaguchi Miwa) (90340348)	三重大学・医学系研究科・准教授 (14101)	
研究分担者	伊藤 寿英 (Ito Toshihide) (90925869)	愛知医科大学・看護学部・助教 (33920)	
研究分担者	小塩 泰代 (Ojio Yasuyo) (60300224)	中部大学・生命健康科学部・准教授 (33910)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------